

雲仙岳火山活動状況(2006年12月～2007年2月)*

Volcanic Activity of Unzen Volcano (Dec. 2006 – Feb. 2007)

九州大学大学院理学研究院地震火山観測研究センター
Institute of Seismology and Volcanology,
Faculty of Sciences, Kyushu University

この期間、雲仙火山の活動は引き続き低調な状態を保っている。特に目立った地震活動もなかった。

第1図に雲仙岳周辺における傾斜変動の観測結果を示す。傾斜計は各点とも坑井内、深度約100mに埋設された倒立振子タイプである。降雨や地震による影響が多少現れているが、特に火山活動に関連すると思われる変動は記録されていない。

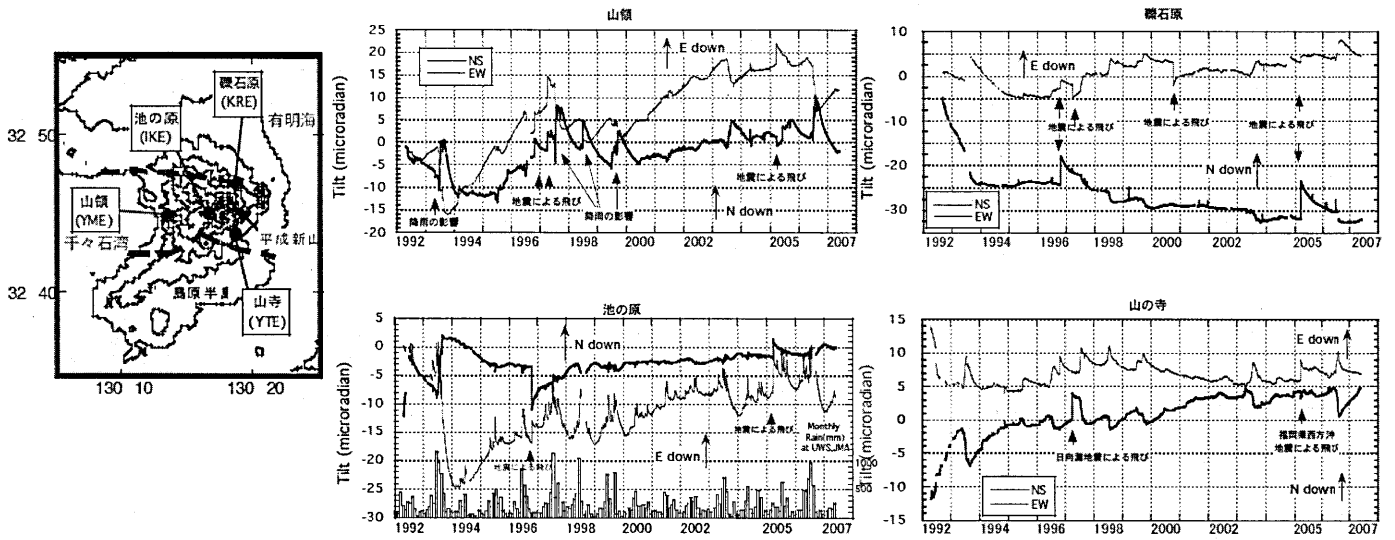
第2図に雲仙岳北麓における全磁力変化を示す。観測は2台のプロトン磁力計を平成新山ドームの北北東約3kmの地点に約500m離して設置して行われている。ドームに近い観測点Proton 2から北側の観測点Proton 1の値を引いた単純差では、ばらつきが大きい。そこで、2地点の全磁力差のばらつきが最小になるように、1992年5、6月のデータを使用して係数を決定して、全磁力差を求めた。これによると、2000年ごろより全磁力差の増加が頭打ちになっており、平成新山付近の消磁領域の拡大が停止状態にあることがわかる。2006年より消磁傾向が見えるが、これは磁力計No. 1周辺の大規模な森林伐採の影響の可能性もあり、検討を要する。

島原観測所温泉観測井(SHV 観測井)における温泉成分等の繰り返し観測(1ヶ月に1度)および水温・水位・雨量の連続観測の結果を報告する。SHV 観測井は、構内の標高47.9mの場所に設置された深さ365mの坑井である。水圧式水位計を地表から30.5m、水晶温度計を329mの深さに設置している。

第3図に2003年9月以降の温泉成分等の測定結果を示す。火山活動に起因すると思われる顕著な変動は見られない。

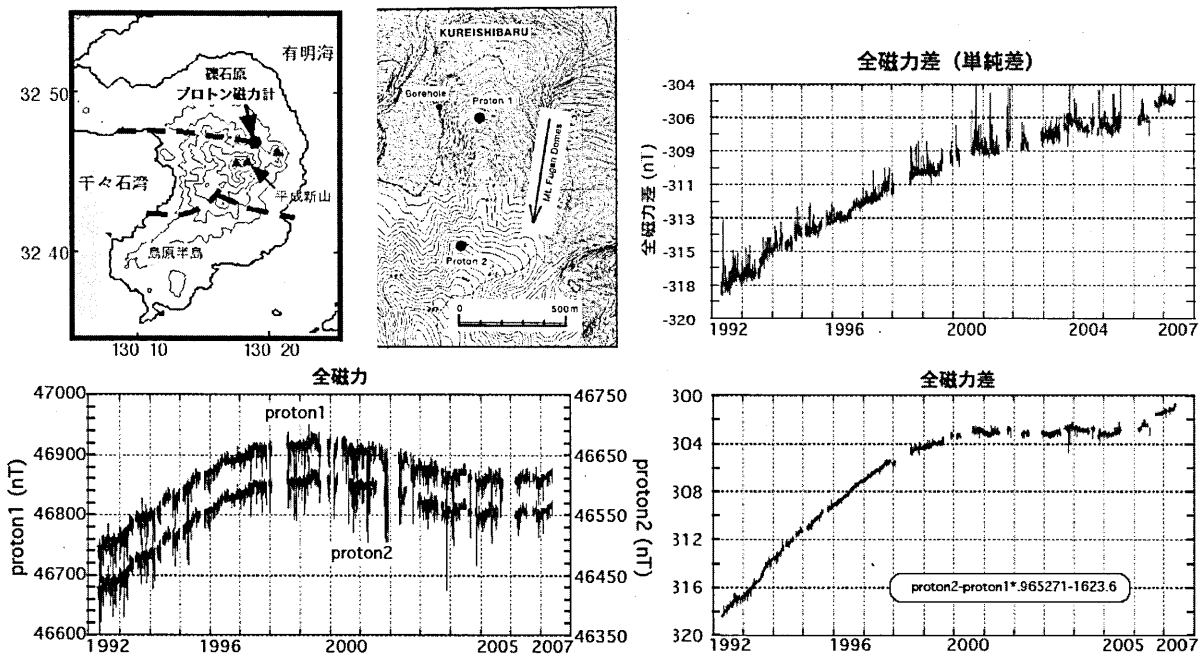
第4図に水温・水位・雨量の連続観測結果を示す。地下水位は、時差2ヶ月・半減期12ヶ月の実効雨量(雲仙岳)と正の相関が強いことがわかっている(回帰期間:1998年1月～1999年12月)。水温は1988年10月～1991年8月の期間にやや高い値を示しているが、その後は微細な変動が観測されるだけで、安定状態が継続している。

* 2007年8月6日受付



第1図 普賢岳周辺の傾斜計配置図と傾斜変化（日平均値）

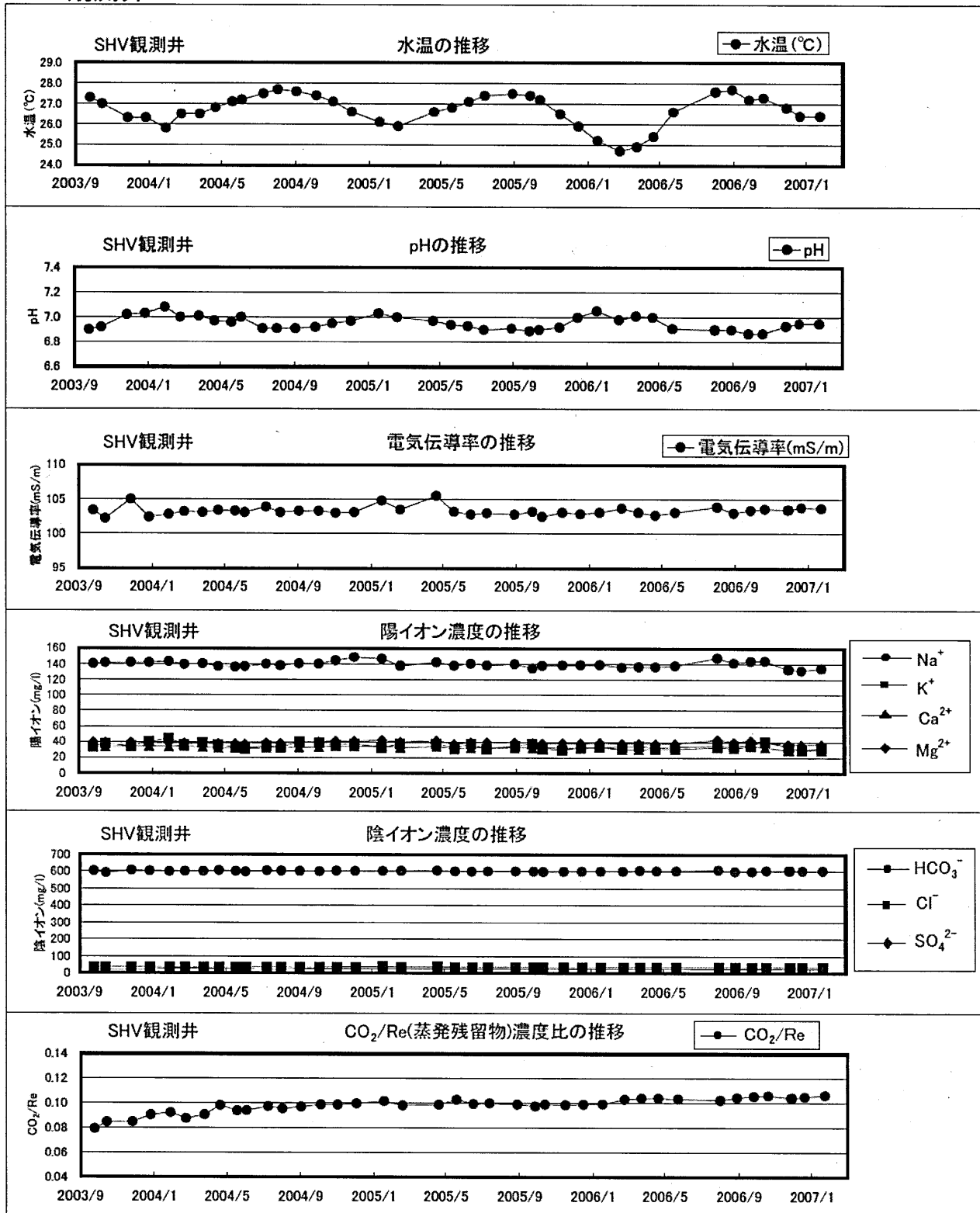
Fig. 1 Distribution of tilt-meters around Fugendake and the daily means of the crustal tilt data.



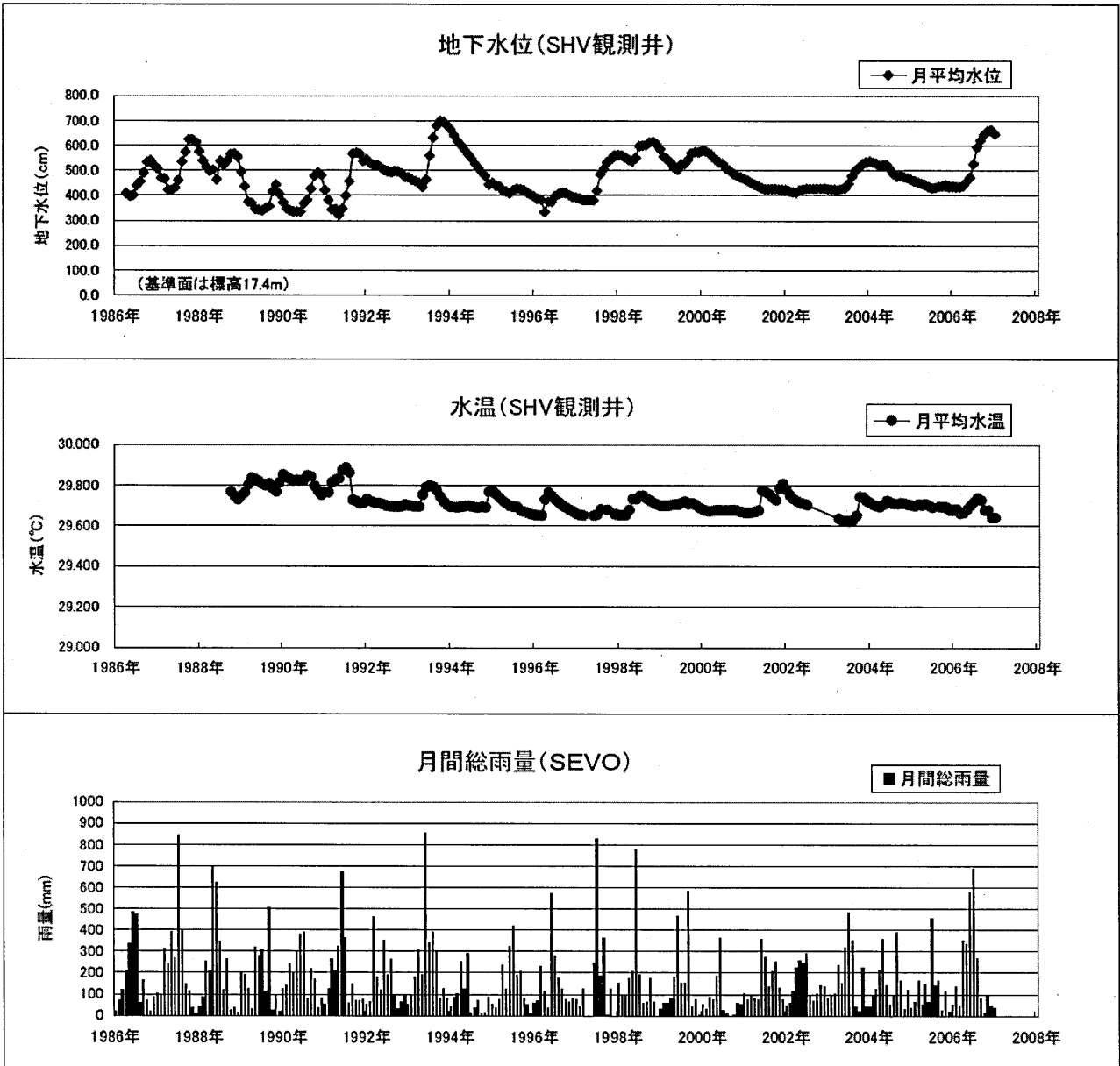
第2図 普賢岳北麓における全磁力変化

Fig. 2 Variation of geomagnetic total force intensity at the northern flank of Fugendake.

SHV観測井



第3図 SHV観測井の水温・pH・電気伝導率・主要化学成分濃度・CO₂/Re(蒸発残留物)濃度比の推移
 Fig.3 Changes in temperature, pH, electrical conductivity, main chemical component concentration and CO₂/Re (evaporation residue) concentration ratio at the SHV borehole.



第4図 SHV観測井における月平均水位・月平均水温・月間総雨量の観測結果。2005年5月以降の月間総雨量は気象庁アメダス島原を使用。

Fig.4 Results of monthly-averaged water level and water temperature observed in the SHV borehole. Monthly total rainfall at the SHV borehole site is shown in the figure. Data of rainfall since May 2005 is from the JMA AMeDAS Shimabara.